

報告へのコメント

コメンテーター 種田博之

WG 主催シンポジウム当日、前もって原稿のかたちでコメントを準備して、それを読み上げたわけではない(コメントのキーワードぐらいは考えていたけれども、基本的に即興でおこなった)。録音をしておけばよかったと、このコメント原稿を書きながら反省するしだいである。この原稿は、シンポ当日にだいたいこのような話をしたといううっすらとした記憶をもとに書いている。そのため、当日話しした内容とずれがありうる。あらかじめお断りしておく。

まず、3名の登壇者である井口真紀子氏・鷹田佳典氏・錦織宏氏(50音順)とコメンテーターの孫大輔氏に対して、質問を投げかけた(コメンテーターの孫氏にも質問をしたのは、彼が社会学に関心を持つ医師だからである)。その後で、質問の背景・コンテキストについてお話しした。

鷹田氏への質問

看護での教育ということで、医学・医師教育とは異なるけれども、実際に教える際にどのような困難があり、それをいかに解決してきたか。また、鷹田氏ご自身の医師研究(医師調査で得られた知見)をどのように看護での教育にフィードバックしてきているのか。

井口氏・錦織氏、ならびに孫氏への質問

医学生だったときに、社会学に関心があったのか。あった／なかったとすると、何をきっかけにして関心を持つようになったのか。

井口氏・錦織氏、ならびに孫氏に対する質問の背景・コンテキストについてである。報告をお聞きして、医学・医師教育において社会学が必要であるということとは理解できた(私も社会学者のはしくれなので、そもそも社会学が必要ではないという立場はとれない)。しかしながら、ご自身が学生だった時から、そのように考えていたのか素朴に聞いてみたかった(あるいは、どのような教育を受けたことで、そのように考えるにいたったのかを知りたかった)。

実際、医学部に勤めていて思うことは、過密なカリキュラムと国試対策——国試至上主義と言ってもいい——である。私が勤める大学では4年生後半——ということは、4年生は夏休みが明けるとCBT対策に追われることになる——から5年生が臨床実習期間となり、6年生は卒業試験ひいては国試のための授業となる。学生は基本的に臨床実習に入るまでは正解のある世界で生きている。臨床実習の開始で、患者などとの関係において不確実な世界——必ずしも一義的な答え

がないので、「成解」を作りあげていかななくてはならない世界——をまさに知ることになる〔ちなみに、「成解」とは、「普遍的 (universal) ではなく、常に、空間限定的 (local) で、かつ、時間限定的 (temporary) な性質をも」ち、「修正と更新に向けて開かれている」解である (矢守他編 2011: 9-10)〕。しかしながら、6年生でまた正解がある世界に戻ってきてしまう。そして、卒後の臨床研修で再度の不確実な世界に直面し、途方に暮れることになる (実際、臨床研修でドロップアウトすることもある)。社会学に関心を持ってもらおうとするならば、症例と関係づけて話をすると食いつきが良い (あるいはリアリティを持てる) のはその通りであろう。となると、臨床実習中か臨床実習後の6年生 (の早い時点) に、おこなうのがベストではあろう (卒業試験・国試対策に追われだすので、6年生でおこなうのであれば、6年生に上がったばかりの時点が望ましいと思われる)。しかし、過密なカリキュラムと国試対策の制約から、症例と関係づけて社会学の話をする授業時間を設けることは容易ではない。

かりに現状の国試に社会学が組み込まれて (質疑応答時の防衛医科大・金子雅彦氏が何問かは出ているような話をしていたと思う)、国試対策系の科目を社会学系の教員が担当しなければならなくなったならば、別の難問に出くわすことになりうる。国試の要件は「正解があること」である。正解が一義的に決まらない問題は出題されない。つまり、国試対策系の科目では、淡々と確定済みの事実 (のみ) を教えていくことになる。これは、社会学の批判力 (あるいは想像力) を殺ぐことになるのではないかと、私は危惧している。この点で、医学部における社会学教育はひょっとしたら岐路に立っているのかもしれないと、感じてもある。

井口氏・錦織氏、ならびに孫氏からのリプライを受けて、思ったことを書いておく (以下はシンポ当日のコメントではない)。井口氏だったような気もするけども、どなたか「(社会学の) 種をまく」というようなことをおっしゃったと記憶している (あるいは、まったくの記憶違いかもしれない)。種がまかれたことで、井口氏・錦織氏、ならびに孫氏などのような存在が現れたと考えるならば、まさに種をまくことは重要である。だから、私たち (医学教育において社会学教育に携わる社会学者) は種をまきつづける必要がある。しかしながら、たんに種をまくだけではなくて、いかに、どの時点で、そして何をまくのか (植物でたとえるならば、適切な時期に、植物の種類でまき方も考えて、まかないと芽が出ない)、そしてまいた後の世話をどうするのかという問題もある。これらは社会学教育に携わる者にとって重要な問いであると思われる (また、この問題は医学教育における社会学教育に限定されるものでもないことに留意しておきたい)。学会会員の方々にも考えていただければ幸いである。

シンポジウム当日、WG (というよりも私の) 想定を超えて多くの参加者が報告会場にお越しになった。そして、質疑応答の時間も活発に応答がなされた。本来であれば、いかなるコメントがなされたのかも記録として残すべきと思われる。しかしながら、冒頭で述べたように、未録音といった (私の) 不備があり、正確

性を欠くため、フロアからのコメントを挙示することは差し控えさせていただく（コメントしてくださった参加者の方にはお詫び申し上げます）。最後に、登壇者のみなさまならびにシンポジウムに参加してくださったフロアの方々に感謝いたします。

参考文献

矢守克也他編、2011、『防災・減災の人間科学——いのちを考える、現場に寄り添う』新曜社